

平成27年度がんサバイバーシップ研究助成金

研 究 報 告 書
(年 間)

平成28年4月27日

公益財団法人 がん研究振興財団

理事長 高 山 昭 三 殿

研究施設 ホスピスケア研究会

住 所 東京都豊島区池3-3-7-401

研究者氏名 花出 正美



(研究課題)

「がんを知って歩む会」改編プログラムと運営スタッフ向け教材の開発

平成27年7月23日付助成金交付のあった標記研究課題について研究が終了致しましたのでご報告いたします。

がん研究振興財団平成 27 年度がんサバイバーシップ研究助成金報告書

がんサバイバーのためのサポートグループおよび「がんを知って歩む会」 の新規立ち上げ・運営に対する医療者のニーズと課題 - 「がんを知って歩む会」改訂プログラムと運営スタッフ向け教材の開発に向けて - ＜中間報告＞

花出正美（ホスピスケア研究会・理事、がん研究会有明病院）
飯野京子（ホスピスケア研究会・理事長、国立看護大学校）
細矢美紀（ホスピスケア研究会・副理事長、国立がん研究センター）
關本翌子（ホスピスケア研究会・副理事長、国立がん研究センター東病院）
小野桂子（ホスピスケア研究会・理事）
小野智子（ホスピスケア研究会・会員、国立がん研究センター）
林 美子（ホスピスケア研究会・理事、愛知県がんセンター愛知病院）
井上さよ子（ホスピスケア研究会・理事、愛知県がんセンター中央病院）
中山祐紀子（ホスピスケア研究会・理事、越川病院）

I. はじめに

がんサバイバーであるがん患者・家族の悩みや不安の軽減、療養生活の質の向上、また安心して暮らせる社会の構築のためには、医療者によるサポートのみならず、同じような経験をもつがん経験者同士による体験の共有、すなわちピアサポートの有効性が注目されている¹⁾。

サポートグループとは、医療者がファシリテーターとして加わり、参加者のグループダイナミックスとピアサポート機能を活用して支援を提供するグループである。サポートグループを通して、がん患者・家族は、ピアサポートを得ると同時に、医療者から情報やサポートを得ることができる。

I can Cope は、米国の看護師 Judi Jhonson が開発したがん患者の教育支援プログラムであり²⁾、American Cancer Society によって、コミュニティベースのサポートグループとして、さらにオンラインプログラムとして、がんサバイバーのニーズに応じて改定されながら、全米で展開されている。

ホスピスケア研究会では、1994 年より I can Cope 日本版である「がんを知って歩む会」を運営しており³⁾、延べ 3,000 人以上のがん患者・家族が参加してきた。現在、東京、札幌、名古屋など 5 ヶ所で実施されている。「がんを知って歩む会」の目的は、がんサバイバーである患者・家族が、がんとうまく向き合って QOL の高い生活を送れるように、問題やストレスに対処する能力を高めることである。「がんを知って歩む会」のプログラムは、がん治療による身体的、心理的、社会的影響と対処法、また在宅医療や緩和ケアなどに関する情報提供、グループでの話し合い、リラクゼーション技法の体験などから構造化されている。

がんサバイバーのためのサポートグループおよび「がんを知って歩む会」の新規立ち上げ・運営に対する医療者のニーズと課題を明らかにすることは、サポートグループを推進する上で重要であると考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は、がんサバイバーのためのサポートグループおよび「がんを知って歩む会」の新規立ち上げ・運営に対する医療者のニーズと課題を明らかにすることであった。

III. 研究方法

1. 対象者

対象者は、ホスピスケア研究会主催研修会「がん患者と家族のためのサポートプログラムの展開とファシリテーターの役割ーがんを知って歩む会を通してー」（2015 年 11 月 22 日、23 日開催）に参加した医療者であった。

2. 調査期間

2015 年 11 月～2016 年 2 月

3. 調査内容

- ・対象者の背景：年齢、性別、職種、臨床経験年数、現在の所属施設の種類、配属部門
- ・所属施設におけるがんサバイバーのためのサポートグループの有無
- ・がんサバイバーのためのサポートプログラム（医療者主催のがん患者・家族向け講演会・教育プログラム、患者会、患者サロン、家族会、サポートグループなど）への関与経験
- ・がんサバイバーの支援に関する自己・所属施設・国の課題
- ・がんサバイバーのためのサポートプログラムで取り上げるべき事項
- ・「がんを知って歩む会」実施についての考え：一般的な必要性、所属施設での必要性、関与の意向、困難感
- ・自施設で「がんを知って歩む会」新規立ち上げ・実施する場合の課題
- ・自施設で「がんを知って歩む会」新規立ち上げ・実施する場合に助けになること
- ・研修会「がん患者と家族のためのサポートプログラムの展開とファシリテーターの役割ーがんを知って歩む会を通してー」の目標達成度
- ・「がんを知って歩む会」に対する感想・意見

4. データ収集方法

ホスピスケア研究会主催研修会「がん患者と家族のためのサポートプログラムの展開とファシリテーターの役割ーがんを知って歩む会を通してー」の開始時に、①趣旨説明書、②無記名自記式調査票、③返信用封筒を配布し、趣旨説明書に基づいて説明して、研究に協力できる場合には、質問 1（2 日間の研修会に参加する以前のあなたの考えについてお尋ねします）について、回答の記入を依頼した。

研修会終了時に、趣旨説明書に基づいて再度説明して、研究に協力できる場合には、回答の記入後、封をして会場内の回収ボックスまたは郵送ポストへの投函を依頼した。

さらに、回収目安期間終了後に、郵送法にて調査協力への再依頼を行った。

5. データ分析方法

統計学的手法および内容分析手法を用いて分析した。

6. 倫理的配慮

ホスピスケア研究会研究倫理委員会の承認を得た。

1) インフォームドコンセントを受ける手続き等

対象者へは、趣旨説明書にて、研究目的、方法、自由意思による協力の保障、個人が特定されることはないこと、および研究協力に伴う時間的負担について説明し、調査票への回答・返信をもって、研究協力への同意が得られたものとみなした。

2) 個人情報等の取り扱い

調査票は無記名とし、データは、研究者または研究者が委託した者が数量的に扱い、個人が特定されることはなかった。

3) 研究対象者に生じる負担ならびに予測されるリスクおよび利益

研究対象者には、調査表の解答に 15 分程度の時間的拘束が予測され、直接的な利益はなかった。

4) 情報の保管および廃棄の方法

調査票は、電子媒体データへの変換完了日まで、鍵のかかる場所で保管した。研究終了報告後 3 年以内、または研究結果の最終公表後 3 年以内のいずれか遅い日まで、電子媒体データはパスワードをかけて保管する。印刷資料、電子媒体データなど、いずれの資料も、物理的に内容の読取りが不可能な状態にした後で廃棄する。

5) 研究機関の長への報告

研究の終了についてはホスピスケア研究会理事長へ報告する。

6) 研究に係る利益相反

本研究は、がん研究振興財団によるがんサバイバーシップ研究支援事業の助成金を資金源として行った。この他に、特定の団体からの資金提供などは受けなかった。研究組織全体に関して起こりうる利益相反はなかった。

7) 研究に関する情報公開の方法

データは研究目的以外には使用しない。研究成果は、研究助成に対する報告や学会報告によってがんサバイバーシップ支援の質の向上に活用する。研究対象者から希望があった場合には、研究成果を報告する。

8) 研究対象者等およびその関係者からの相談等への対応

研究対象者等からの本研究の相談については、研究代表者または共同研究者が対応することとし、趣旨説明書に問い合わせ先、住所、電話番号を記載した。

IV. 結果

1. 対象者の概要

1) 対象者の背景

対象者は、ホスピスケア研修会主催研修会「がん患者と家族のサポートプログラムの展開とファシリテーターの役割ー“がんを知って歩む会”を通してー」の参加者 20 人（回収率 60.1%）であった。

対象者の背景は、表 1 に示す。

表 1 対象者の背景

(n=20)

年齢	39.7±6.5 歳
性別 女性	19 人 (95.0%)
無回答	1 人 (5.0%)
職種 看護師	17 人 (85.0%)
医療ソーシャルワーカー	2 人 (10.0%)
無回答	1 人 (5.0%)
臨床経験年数	16.4±6.0 年
現在の所属施設 がん診療連携拠点病院	7 人 (35.0%)
一般病院	9 人 (45.0%)
診療所・クリニック	0 人 (0.0%)
訪問看護ステーション	1 人 (5.0%)
教育機関	1 人 (5.0%)
その他	1 人 (5.0%)
無回答	1 人 (5.0%)
病院所属者の勤務部門* 病棟	8 人 (50.0%)
外来	2 人 (12.5%)
がん相談支援センター	2 人 (12.5%)
その他	3 人 (18.8%)
無回答	1 人 (6.3%)
所属施設のサポートグループの有無 ある	13 人 (65.0%)
ない	6 人 (30.0%)
無回答	1 人 (6.3%)

*n=16

2) がんサバイバーのためのサポートプログラムへの関与経験

がんサバイバーのためのサポートプログラムへの関与経験は、ある 7 人 (35.0%)、ない 12 人 (60.0%)、無回答 1 人 (5.0%) であった (図 1)。

関与経験があるがんサバイバーのためのサポートプログラムのタイプは、図 2 に示す。

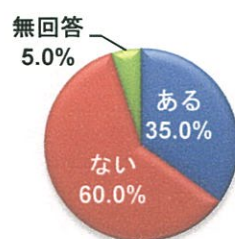


図 1. がんサバイバーのためのサポートプログラムへの関与経験 (n=20)

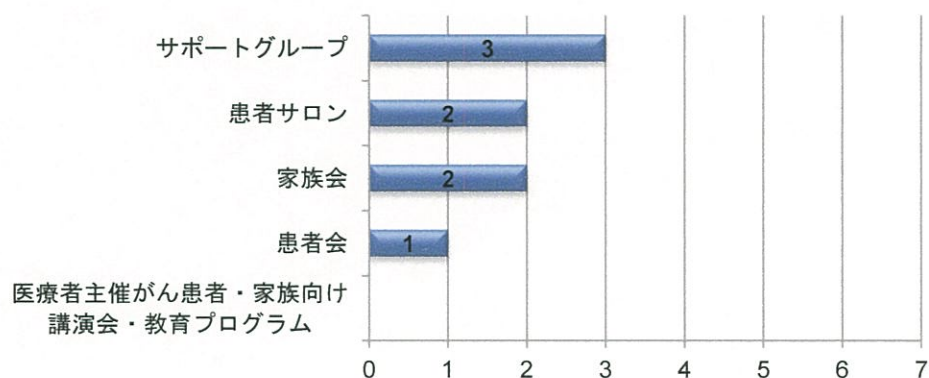


図2. 関与経験があるがんサバイバーのためのサポートプログラムのタイプ (n=7)

3) 対象者が参加した研修会の概要

対象者が参加した研修会「がん患者と家族のためのサポートプログラムの展開とファシリテーターの役割ーがんを知って歩む会を通してー」の概要は、表2に示す。

表2. 研修会の概要

目的：がん患者と家族のサポートプログラムの展開とファシリテーターの役割について学ぶ 目標：・がん患者と家族のためのサポートプログラムの意義を理解する。 ・グループをファシリテートするためのコミュニケーション基礎技法を学ぶ。 ・がん患者と家族のための サポートプログラム「がんを知って歩む会」を理解する ・「がんを知って歩む会」第3セッションの展開を、参加者（患者・家族）、ファシリテーター、サブファシリテーターの立場で体験する。 ・研修を通して学んだことを患者・家族ケアにどのように活かすことができるかを考える。
内容：1日目＜4時間20分＞ 講義「がん患者と家族のサポートプログラム」 講義・演習「コミュニケーションの基礎技法」 演習「グループをファシリテートするためのコミュニケーション技法」 2日目＜5時間30分＞ 講義「“がんを知って歩む会”の展開」 演習「“がんを知って歩む会”の展開の体験」 演習「患者・家族のサポートのあり方」

2. がんサバイバーの支援に関する自己・所属施設・国の課題

がんサバイバーの支援に関する自己・所属施設・国の課題について、得られた主な回答を表3に示す。

表3. がんサバイバーの支援に関する自己・所属施設・国の課題

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・がん患者が自身の QOL を維持しながら通院治療を継続できるためのサポートを組織において充実させたい。・家族の支援が必要だ。・入院期間の短縮化、外来治療が主体であることが起因となり、家族との接点をとりにくい。・がんと向き合い対話ができる場所、環境が必要だ。・患者や家族が、がん・生きること・死ぬことについて話ができる環境を整える。・同じような体験を共有する場を（人）をつくることをサポートする。・身体症状がある人、治療を受けている人に対する治療・ケア・サポートはあるが、在院日数短縮や業務の多さ・煩雑化に伴い、その他の人に対する支援ができていないのが現状である。・医療者からとりあげられていない患者への支援や継続的支援が課題だ。・がん患者の症状への対応が中心となり、生活や思いについて対応することがない。医師不足や病院自体にそのようなことを考える余裕がないため、そのようなことに力を入れようとする意識、意欲、発進力を持つ人材がない。・がんサバイバーをサポートできる人材が不足している。・がん専門病院でないことから、病院全体でがんサバイバーの支援を考える機会がほとんどない。・病院と地域が密接に関わっていく必要性を感じる。・どこに住んでいても同じ医療を受けられ、自分の得たい情報が得られ、自分で選択できる環境づくり。・情報が取り入れやすいシステム。・資金面。・がんサバイバーの支援への参加者が少ない。 |
|---|

3. がんサバイバーのためのサポートプログラムに関する考え

1) がん患者・家族のためのサポートプログラムは必要だと思う

研修会前・後において、「がん患者・家族のためのサポートプログラムは必要だと思う」について、“まったく思わない0” “とても思う10”の11段階で回答を得た（図3）。

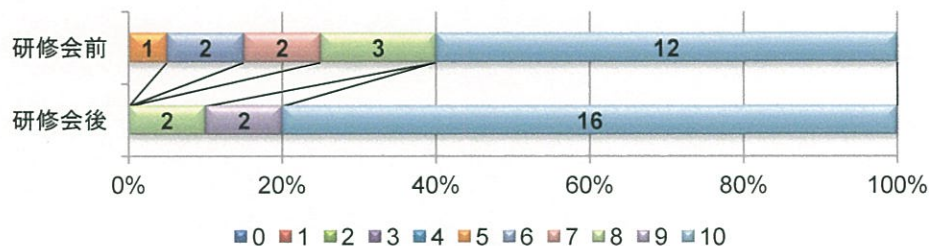


図3. がん患者・家族のためのサポートプログラムは必要だと思う＜研修会前後＞（n=20）

2) 反射・反映のコミュニケーションスキルを活用できる

研修会前・後において、「反射・反映のコミュニケーションスキルを活用できる」について、“まったく思わない0” “とても思う10”の11段階で回答を得た（図4）。

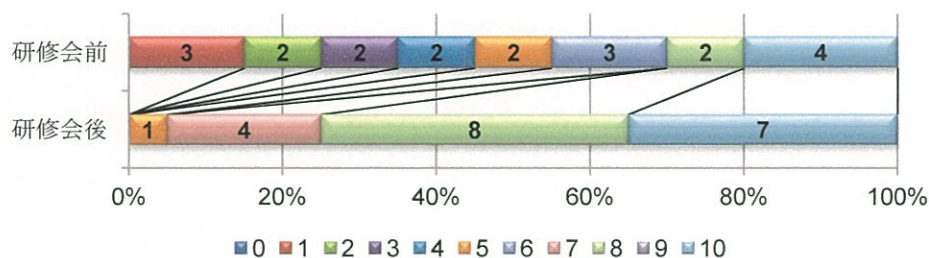


図4. 反射・反映のコミュニケーションスキルを活用できる＜研修会前後＞（n=20）

3) グループファシリテーターの役割がイメージできる

研修会前・後において、「グループファシリテーターの役割がイメージできる」について、“まったく思わない0” “とても思う10”の11段階で回答を得た（図5）。

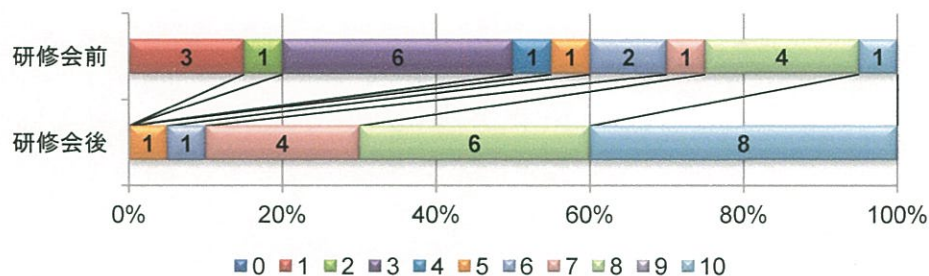


図5. グループファシリテーターの役割がイメージできる＜研修会前後＞（n=20）

4) グループファシリテーターの役割を担当できる

研修会前・後において、「グループファシリテーターの役割を担当できる」かについて、“まったく思わない 0” “とても思う 10” の 11 段階で回答を得た (図 6)。

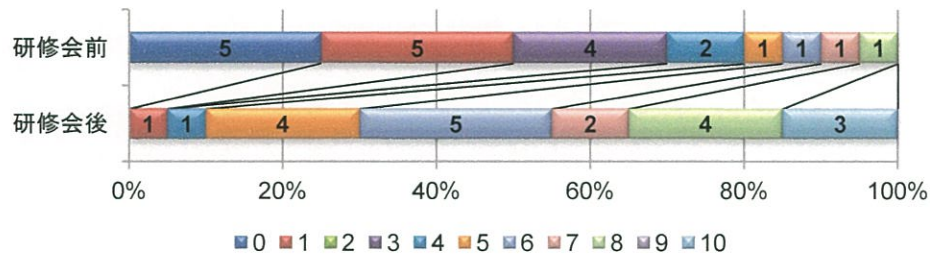


図 6. グループファシリテーターの役割を担当できる<研修会前後> (n=20)

5) がん患者・家族のためのサポートグループの実際の運営・展開場面がイメージできる

研修会前・後において、「がん患者・家族のためのサポートグループの実際の運営・展開場面がイメージできる」かについて、“まったく思わない 0” “とても思う 10” の 11 段階で回答を得た (図 7)。

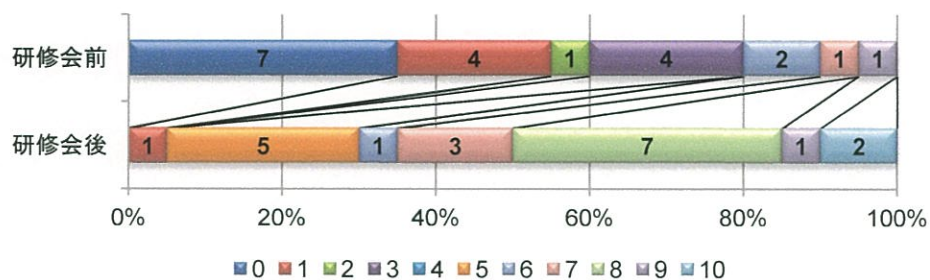


図 7. がん患者・家族のためのサポートグループの実際の運営・展開場面がイメージできる
<研修会前後> (n=20)

6) がんサバイバーのためのサポートプログラムで取り上げるべき事項

13 項目について、「がんサバイバーのためのサポートプログラムで、取り上げることは、重要だと思いますか?」という質問に対して、“重要ではない 0” “とても重要である 10” の 11 段階で回答を得た (図 8)。

“10”の回答割合が高い項目は、“周囲の人に自分の気持ちを伝えること” 17 人 (85.0%)、
“心のストレス” 16 人 (80.0%)、“心のストレスに対処する方法” 16 人 (80.0%)、“医
師とのコミュニケーションのもち方” 15 人 (80.0%)、“療養生活に活用できる情報” 15
人 (80.0%)、“大切なことの整理” 15 人 (80.0%)、“もしも病気が進行した場合に利用で
きる医療ケア” 15 人 (80.0%)、“症状に対処する方法” 14 人 (70.0%) などであった。

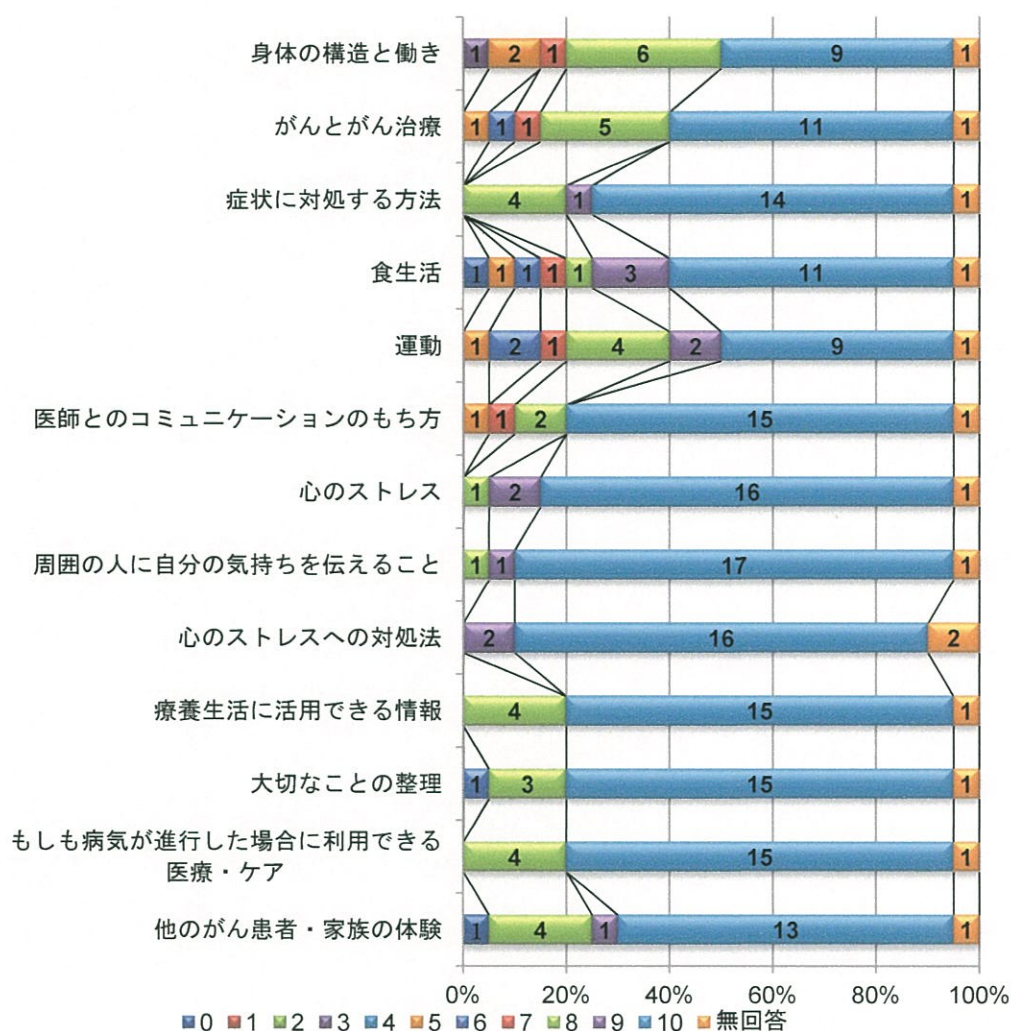


図 8. がんサバイバーのためのサポートプログラムで取り上げる事項としての重要性 (n=20)

4. 「がんを知って歩む会」に関する考え

1) 「がんを知って歩む会」に対する考え

がん患者・家族のためのサポートグループ「がんを知って歩む会」に対する考えについて、研修会終了後に、“まったく思わない0” “とても思う10”の11段階で回答を得た(図9)。

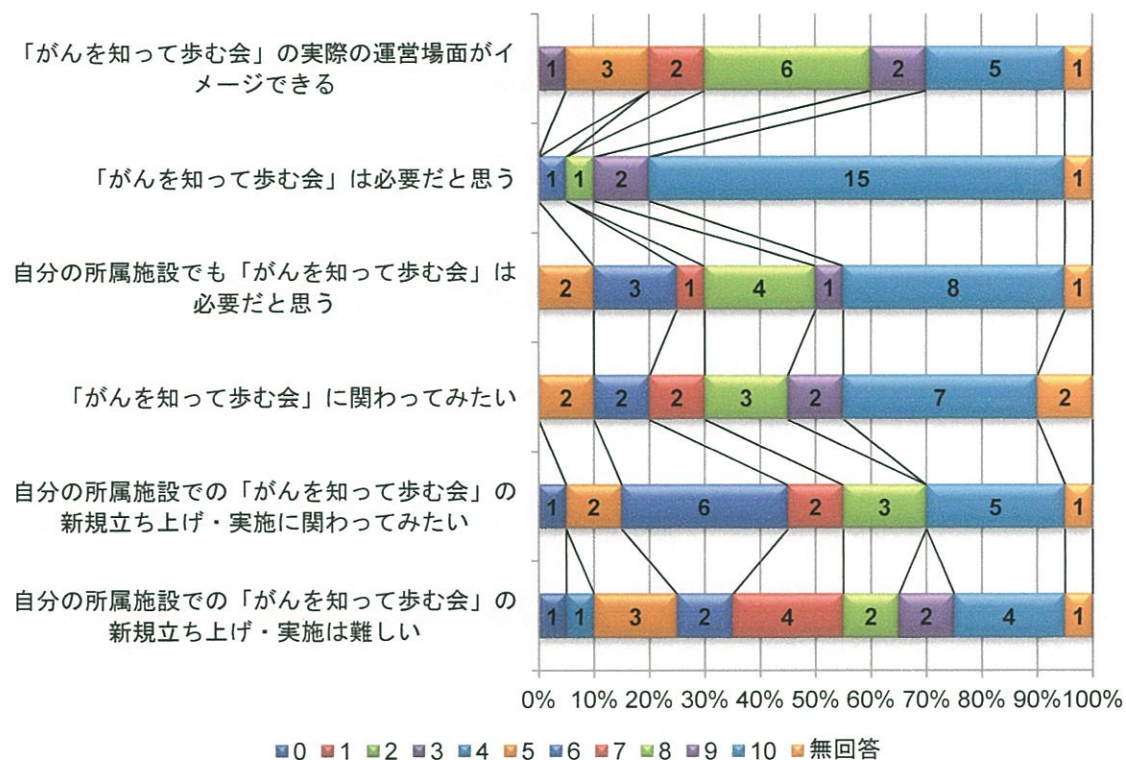


図9. 「がんを知って歩む会」に対する考え<研修後> (n=20)

2)「がんを知って歩む会」を自施設で実施する場合の課題

がんサバイバーのためのサポートグループ「がんを知って歩む会」を自施設で実施する場合の課題に対する考えについて、研修会終了後に、“まったく思わない 0” “とても思う 10” の 11 段階で回答を得た (図 10)。

“10” の回答割合が高い項目は、“継続して実施するための時間やマンパワーの確保が難しい” 13 人 (65.0%)、“多くの運営スタッフが必要だ” 13 人 (65.0%)、“施設・組織の支援 (理解、場所、資金) を得るのが難しい” 9 人 (45.0%)、“そのように新規立ち上げをすればよいのかわからない” 6 人 (30.0%)、“どのように実際の運営・展開をすればよいのかわからない” 6 人 (30.0%)、“どのように運営スタッフの教育・研修をすればよいのかわからない” 6 人 (30.0%) などであった。

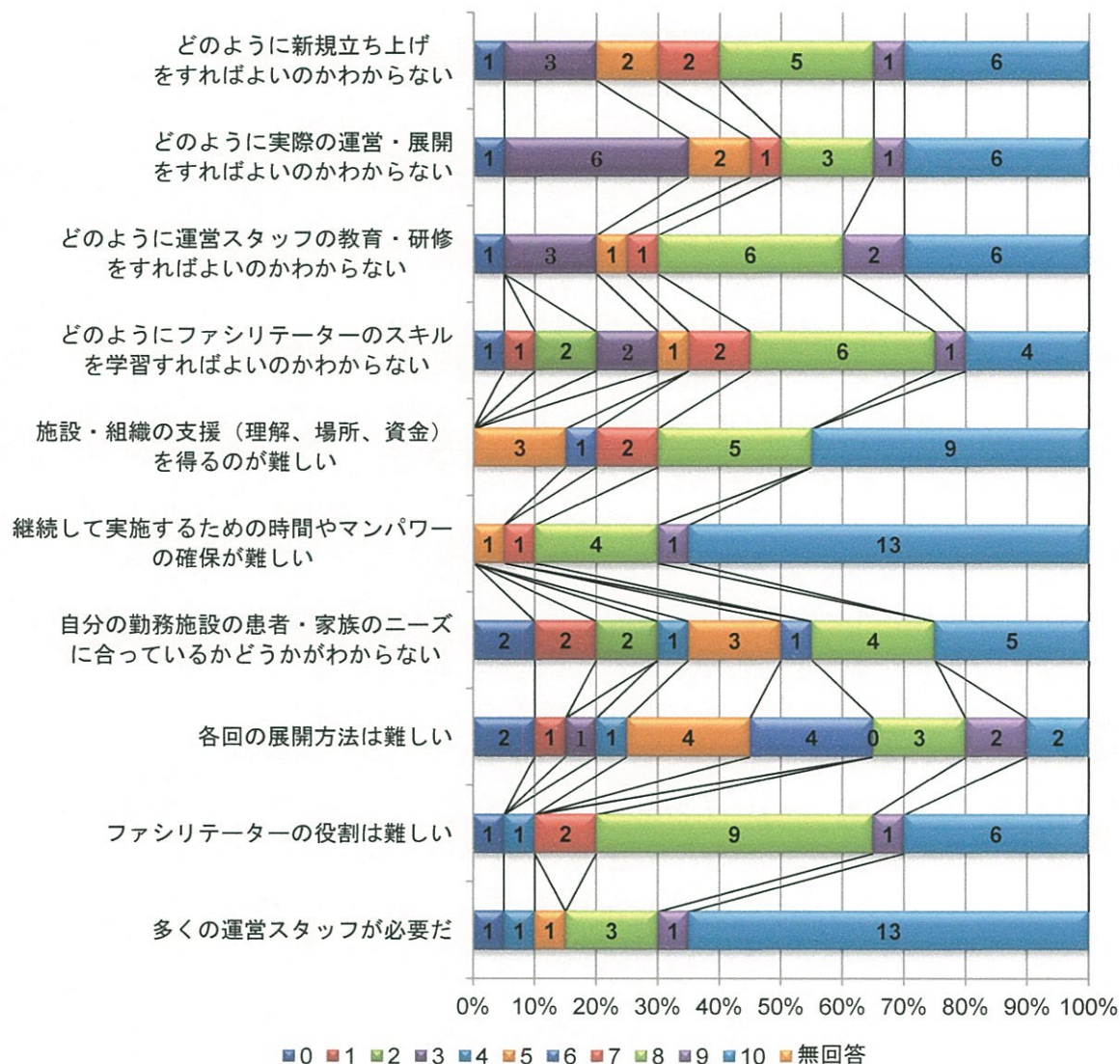


図 10. 「がんを知って歩む会」を自施設で実施する場合の課題＜研修後＞ (n=20)

3) 自施設で「がんを知って歩む会」を実施する場合に助けになること

自施設で「がんを知って歩む会」を実施する場合に助けになることは、“他施設での見学参加” 17人(85.0%)、“新規立ち上げマニュアル” 17人(85.0%)、“運営マニュアル” 17人(85.0%)、“研修会” 15人(80.0%)、“運営スタッフ経験者による研修サポート” 14人(70.0%)、“運営サポート研修者による運営当日のサポート” 14人(70.0%)などであった(図11)。

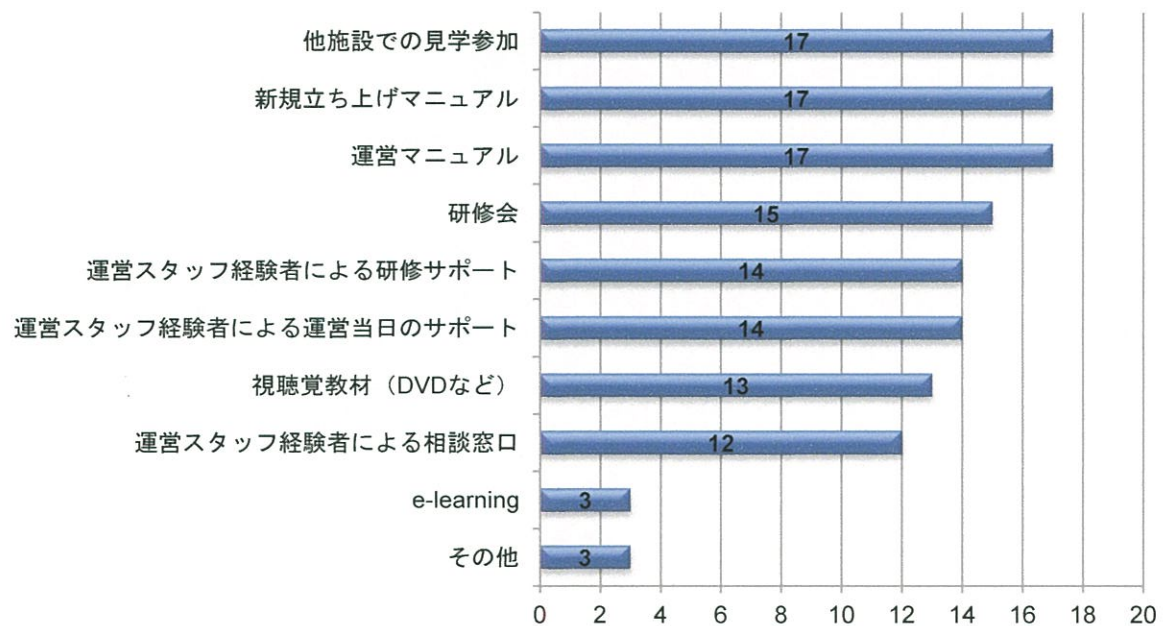


図 11. 自施設で「がんを知って歩む会」を実施する場合に助けになること<研修後> (n=20)

4)「がんを知って歩む会」に対する感想・意見

「がんを知って歩む会」に対する感想・意見について、自由記載の回答を表4に示す。

表4.「がんを知って歩む会」に対する感想・意見<研修後>

- ・がんに罹患した患者さん、ご家族に対してのサポート体制は必要であると再認識しました。自分自身での気づきのため、同じ境遇にある方々との語り合いは重要な場であると思いました。
- ・患者さん家族が自ら学ぶ場であることを知った。辛い体験などを話し合うだけでないことを知った。
- ・4回シリーズで情報提供の場であり、また患者さん同士の知り合える場であることが素晴らしく良いと感じました。
- ・きちんとプログラムが決まっていて分かりやすい。素晴らし会だと思います。
- ・構成がしっかりしていて、患者・家族にとって、分かりやすく、理解しやすいと思った。
- ・近くに開催会場があれば、患者さん達はどんなに助けられるかと思いました。
- ・最初は必要性が分からなかったが、実際に運営に関わり、患者の変化を見てみると、この会の必要性、重要性を感じる。患者が、「がんを知って歩む会」力をサポートするという主旨を忠実に守っていると思う。すごく良くつくられたプログラムだと思う。
- ・がん患者が、がんと向き合う一つ的手段として、必要な場であると感じた。しかし、院内の「がんを知って歩む会」のチラシを見ただけで参加する患者がどのくらいいるかも考えた。このような場があることを患者に伝えていくことも組織における医療者の役割と思った。情報の提供方法を考えたいと思った。
- ・グループダイナミクスが活性化し、参加者の体験共有や相互関係が生まれるために、コミュニケーション能力の向上や自身の感性も重要であると感じました。「がんを知って歩む会」はとても興味を感じますが、自施設で取り組むには課題も大きいと感じました。
- ・とても大切なサポートだと参加して思いました。運営、企画から全て、人的にも時間的にも施設の協力体制がないと。
- ・当院でも行いたいのですが、まずは協力してもらええる仲間作りからだと思いました。
- ・とても勉強になりました。
- ・なかなかできることではないので、経験して実施しておられていて素晴らしいと思う。サバイバーだけでなく、ファシリテーターを育成しているための企画も行っていて本当にサバイバーを支援したいと思う気持ちが伝わってきます。
- ・もっと沢山、県に7つはできるといいなと思います。とても良い会だと思います。患者、家族にとって絶対に必要！！
- ・「がんを知って歩む会」のプログラムが、地方でも展開できるように体制がつけられたら嬉しいです。
- ・看護部での開催が行われているが、地方は地域性が強く、又、スタッフの人材がないと思われる。しかし、患者にとっては必要な会だと思う。
- ・運営マニュアルを基に、研修会があれば参加したい。自施設で協力者を増やすためにファシリテーターができる人を育てたい。そのためにファシリテーター養成トレーナーの研修があれば参加したい。
- ・体験、気持ちをグループで共有する点は、私の所属施設で企画している患者サロンの目指すところなので大変参考になりました。

V. 考察

1. がんサバイバーのためのサポートプログラムに関する医療者の意識

医療者（主に看護師）は、がんサバイバーの支援の充実を課題として認識する一方で、日常業務では治療や症状を重視するなかで、生活、生きること、死ぬことなどががんサバイバーシップという視点を維持することが難しい状況にあると考えられる。

医療者向け研修会を通して、医療者は、がんサバイバーのためのサポートプログラムの必要性の認識を高め、グループファシリテーターの役割やサポートグループの運営・展開の実際場面のイメージを深めていた。がんサバイバーのためのサポートプログラムの充実を推進する上では、医療者向け研修会などを通して、医療者の意識を高めていくことが重要であると考えられる。

がんサバイバーのためのサポートプログラムで取り上げるべき事項として、医療者が認識していた上位項目は、“周囲の人に自分の気持ちを伝えること”、“心のストレス”、“心のストレスに対処する方法”、“医師とのコミュニケーションのもち方”、“療養生活に活用できる情報”、“大切なことの整理”、“もしも病気が進行した場合に利用できる医療ケア”、“症状に対処する方法”などであった。これらは、がんサバイバーが自身のもつ力を高め、がんと共に自分らしく最良な QOL を生きること、アドバンスド・ケア・プランニングにも関連すると考えられる。

実際にがんサバイバーのためのサポートプログラムで取り上げるべき事項については、医療者の意識のみならず、がんサバイバーのニーズとのすり合わせが重要である。

2. がんサバイバーのためのサポートグループ「がんを知って歩む会」の新規立ち上げ・運営に対する医療者のニーズと課題

医療者は、「がんを知って歩む会」について、がんサバイバー同士が語り合える場、情報を得る場としてがんサバイバーにとって有用であると認識していた。その一方で、「がんを知って歩む会」の自施設での新規立ち上げ・運営にあたっては、時間不足やマンパワー不足、ファシリテーションスキル不足などを課題とし、難しさを認識している傾向にあった。

自施設で「がんを知って歩む会」を実施する場合に助けになることとして、“他施設での見学参加”、“新規立ち上げマニュアル”、“運営マニュアル”、“研修会”、“運営スタッフ経験者による研修サポート”、“運営サポート研修者による運営当日のサポート”などが挙げられた。今後「がんを知って歩む会」やサポートグループを推進する上では、これらの整備が課題であると考ええる。

VI. おわりに

本研究の対象者は、主体的に研修会に参加した者で、看護師が多数をしめており、がんサバイバーのサポートに関して意識の高い集団であったと推察される。今後さらに、医療者全体、病院組織などががんサバイバーのサポートへの理解・意識を高める必要があると考えられる。

がんサバイバーのためのサポートグループ「がんを知って歩む会」が開始された 1994 年開始当時と現在とでは、日本のがん医療、さらにがん患者・家族を取り巻く状況は大きく変化した。従って、「がんを知って歩む会」のプログラムが現在のがんサバイバーのニーズを反映したものであることを確認することが重要である。現在、研究者らは、「がんを知って歩む会」に参加したがんサバイバー（患者・家族）を対象として、サポートプログラムおよび「がんを知って歩む会」に対するがんサバイバーのニーズを明らかにすることを目的とした研究に継続的に取り組んでいる。

がんサバイバーのニーズと医療者のニーズや課題を考慮しながら、「がんを知って歩む会」などがんサバイバーのサポートプログラムを推進していきたい。

謝辞

本研究は、がん研究振興財団による平成 27 年度がんサバイバーシップ研究助成金を受けて行いました。心より感謝申し上げます。

<文献>

- 1) 厚生労働省 (2012) : がん対策推進基本計画
http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/gan_keikaku.html <2015/10/1 検索>.
- 2) Judi Johnson & Linda Klein (1994) : I Can Cope: Staying Healthy With Cancer – Reversed and Updated, CHRONIMED Publishing.
- 3) 季羽倭文子・丸口ミサエ監修 (2005) : がん患者と家族のサポートプログラムー「がんを知って歩む会」の基本と実践, 青海社.